

花のき村と盗人たち

新美南吉

むかし、花のき村に、五人組の^{ぬすびと}盗人がやって来ました。

それは、若竹が、あちこちの空に、かぼそく、ういういしい緑色の^め芽をのばしている初夏のひるで、松林では^{まつせみ}松蟬が、ジイジイジイ^な鳴いていました。

^{ぬすびと}盗人たちは、北から川に沿ってやって来ました。花のき村の入り口のあたりは、すかんぽやうまごやしの^は生えた緑の野原で、子供や牛が遊んでおりました。これだけを見ても、この村が平和な村であることが、**盗人**たちにはわかりました。そして、こんな村には、お金やいい着物を持った家があるに違いないと、もう喜んだのでありました。

川は^{やぶ}藪の下を流れ、そこにかかっている一つの水車をゴトンゴトンとまわして、村の奥深くは行っていきました。

藪のところまで来ると、**盗人**のうちのかしらが、いいました。

「それでは、わしはこの藪のかげで待っているから、おまえらは、村のなかへは行って様子を見て来い。なにぶん、おまえらは**盗人**になったばかりだから、へまをしないように気をつけるんだぞ。金のありそうな家を見たら、その家のどの窓がやぶれそうか、その家に犬がいるかどうか、よっくしらべるのだぞ。いいか^{かまへもん}釜右エ門。」

「へえ。」

と釜右エ門が答えました。これは昨日まで旅あるきの釜師で、釜や茶釜をつくっていたのでありました。

「いいか、^{えびのじょう}海老之丞。」

「へえ。」

と海老之丞が答えました。これは昨日まで^{じょうまへ}錠前屋で、家々の倉や^{ながもち}長持などの^{じょう}錠をつくっていたのでありました。

「いいか、^{かくべえ}角兵エ。」

「へえ。」

とまだ少年の角兵エが答えました。これは越後から来た^{かくべえじし}角兵エ獅子¹で、昨日までは、家々の^{いき}鬨の外で、逆立ちしたり、とんぼがえりをうったりして、一文二文の^{もん}銭を^{もん}貰っていたのでありました。

「いいか、^{かんなたろう}鮑太郎。」

「へえ。」

¹ 越後（××県）から諸国を回る獅子舞

平成 29 年 4 月 10 日

と鉋太郎が答えました。これは、江戸から来た大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社の門などのつくりを見て廻り、大工の修業していたのでありました。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまっている。」

そこで盗人の弟子たちが、釜右エ門は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵エは獅子まいのように笛をヒャラヒャラ鳴らし、鉋太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。

かしらは弟子どもがいってしまうと、どっかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスツパ、スツパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盗人をして来たほんとうの盗人でありました。

「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であったが、今日は、はじめて盗人の親方というものになってしまった。だが、親方になって見ると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子どもがして来てくれるから、こうして寝ころんで待っておればいわけである。」

とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいってみたりしていました。

やがて弟子の釜右エ門が戻って来ました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、ぴょこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそッ、びっくりした。おかしらなどと呼ぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃねえか。ただかしらといえ。」

盗人になりたての弟子は、

「まことに相すみません。」

とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましてね、その飯炊き釜は、まず三斗²ぐらいは炊ける大釜でした。あれはえらい銭になります。それから、お寺に吊ってあった鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あっしの眼に狂いはありません。嘘だと思ふなら、あっしが造って見せましょう。」

² 尺貫法での体積の単位。一斗は約××リットル、また、××升、一石は××斗

「馬鹿馬鹿しいことに威張^{いば}るのはやめろ。」
とかしらは弟子を叱^{しか}りつけました。

新美南吉



1913 年（大正 2）7 月 30 日～1943 年（昭和 18）3 月 22 日

愛知県知多郡半田町（現在の半田市）出身

児童文学者

東京外国語学校英語部文科卒業

本名：新美正八（にいみしょうはち）

代表作：「ごんぎつね」「手袋を買いに」「おじいさんのランプ」「牛をつないだ樁の木」「花のき村と盗人

たち」「久助君の話」「でんでんむしのかなしみ」他

幼くして母を失い、養子に出されるなど寂しい幼少期を送った新美南吉は、中学生時代から創作を始め、弱冠 18 歳で「ごんぎつね」を世に出しました。病に苦しみ、作家としての成功を前に 29 歳で世を去りましたが、その短い生涯を通して、数多くの童話、小説、詩、童謡、戯曲などを創作しています。

物語性豊かでユーモアとペーソスに満ちたそれらの作品は、愛知県知多半島の風土を背景に、哀しみの中にも心の通い合いや美しい生き方といった普遍的なテーマが描かれ、死後 70 年以上が経つ現在もますます多くの人に親しまれています。

（新美南吉記念館ホームページより <http://www.nankichi.gr.jp/nankichi/nankichi-top/nankichi-top.html>）

主な作品リスト

年	年齢	作品
昭和 6 年	18 歳	ごん狐
昭和 8 年	20 歳	手袋を買いに
昭和 14 年	26 歳	最後の胡弓弾き
昭和 16 年	28 歳	良寛物語
昭和 17 年	29 歳	花のき村と盗人たち